



03

村崎修二

MURASAKI Syuji



社会運動から文化運動へ

猿まわしの復活・伝承

談=村崎修二(山口県岩国市・周防猿まわし猿舞座) 写真=小林 淳・荒川健一

「昭和五十二年の四月であったか、郷里の家へ帰っていると光市の村崎という人から電話がかかって、ぜひお目にかかりたいという。

……一時間あまりしてその人があらわれた」

(宮本常一「若い人たち・未来」講談社学術文庫『民俗学の旅』より)



人びとを真正面からとらえよ

1977年4月8日、30歳の僕は勇気をふるって宮本常一先生を周防大島のご自宅に訪ねました。1人では行けないので、友だち2人を誘って3人で。昼ころでしたが、先生は起きたばかりで不機嫌そうな感じで「まあ、上がりなさい。話を聞こう」と家へ上げてくれた。

そこで部落解放同盟山口県連の書記次長と青年部長の肩書きの名刺を出すと、じろつとにらまれて、「どういふことかな?」と言われた。僕は69年、22歳のときに解放同盟の専任職員になったのですが、その任期が10年で満了だったんです。次をどうするか悩んでいた。ちようどフォークシンガールの高石ともやの事務所からマネジャーとして来ないかと誘われていて、軸足を解放運動からフォークソングへ移そうかと考えていたのですが、社会運動と文化運動はすいぶん違うので迷っていた。

先生を知ったのは、当時、光市の教育委員会の社会教育課の主任で、中学校の校長先生だった僕の恩師の岩本忠一という人に、「修二君、君は悩んでいるようだが、大

島出身で宮本常一という人がいる。最近、先生はときどき島へ帰られるようだ。一度、訪ねていっただろうか。君の悩みや要求を聞いてくれるぞ」と勧められたから。それまでは存在を全然知らなかった。

それで宮本先生の著作を読んだら、すごいと思って、光市の七福書店で未来社の著作集を、女房に内緒でへそくつて(笑)月々2巻ずつ買うようになった。それを2年間ぐらい読んだらどうもこれは会わなさいいかんと。文化運動ではなく文化の本質について話を聞かなくやと訪ねたのです。

昼前に行つて、先生は2時間くらい話をしてくれた。ところが、「悪いけど、君はいきなり来たので、じつは大事な先約があつて3時から打ち合わせがある」と。

徳山のマツノ書店という古書店・出版社の松村久さんの紹介で訪ねたので、宮本さんは「松村さんと友だちか」というので引き受けたのに、「部落解放同盟」だから「話が違ふ」と思ったんでしようね。2時間くらい話して、「君につき合いたいけど、今日は帰つてくれ。じつは毎月1回帰つてくるから。君の書いたものはないか」と言うので、『周防じようげゆき・考』と



右・1978年、猿まわしが復活。「8月7日郷里へ帰ると、その夜修二君から電話があつたので、8日に光にゆきたいというので、8日の午後修二君が車で迎えに来てくれた。私だけ見るのはもったいないので家内と孫2人を連れてゆくことにした」(『民俗学の旅』より。撮影・小林淳)

左・村崎さんは、竹大工の稲垣尚さん(本誌62ページ)とともに、各地で「お猿の籠屋」の「里めぐり」を行なっている



『佐渡の春駒』と2冊を渡して帰った。『周防じようげゆき・考』は、70年に猿まわしの消息を訪ねて光市に来た俳優の小沢昭一さんに「猿まわしについて調べてくれないか」と頼まれて、僕たちが住んでいたむらの社会教育者で詩人の丸岡忠雄さんと書いたもので、「じようげゆき」とは猿まわしの興行で他府県へ出かけることです。『佐渡の春駒』は、75年に新婚旅行先の佐渡で祝福芸能「春駒」を知り、それを追いかけて書いた小さな文章です。

すると5月の初めごろに、電話がかかってきた。「宮本だけど、君、今日は来られないか」と。

行つたら「部落解放運動家で僕のところに来たのは君が初めてだ。なんで来たのかと思つたら、『文化のことで来た』と言う。気になるので読んでみた。『春駒』だけど、僕も佐渡へよく行つた。これは佐渡のこと、僕もあまり知らなかった春駒のこともよくわかるし、何といつても君がよくわかる。これは非常にいい文章だ。君がもしものを書くんだつたら、これからはこういう文章を書きなさい。これはいい」と。

しかし村崎君、『じようげゆき・